

現地人の妾となった人、子供を現地人に預けたり、与えたり、余りにも、むごい惨状であります。身近な私達の中からも死んで逝かれました。

渡辺嶺雄さんの奥さんは敗戦前に二人の男の子を置いて病気で亡くなられたので、後妻を郷里から娶られ、その母親が娘がどんな所にいるのかと同伴し渡満されました。帰国の機会を失い、敗戦で日本に帰ることができません。花嫁さんは、お腹に子供さんができておられるようでした。そのうち幸いにもご主人が、敗戦後復員帰国され、ハルピンでは五人家族でした。

男の子供さん二人を現地人に委託されたようでした。三人になりましたが、三人共前後して、発病され死亡されました。一家全滅、お気の毒で申し上げる言葉もありませんでした。

全く地獄そのものでした。

戦争は悪魔、人間を吸血鬼にかり立てて神も佛も無い世の中にしてしまうものだ。ああ人間が恐ろしい。

私の引揚勞苦の綴りはしめくくりませんが、ハルピン、新京、奉天そしてコロ島から乗船へ、日本の舞鶴へと、

幾多の困難をのりこえ、のりこえてきたが涙で頬を濡らすばかりでした。

険には逝った愛しい子供、遠いフィリピンの夫、そして北斗七星またたく北の空をじっと見つめました。そこには満州が……。

ああ、私は生きていた。祖国幾山河。昭和二十一年六月二十六日に生還し引揚げたのである。

惨苦！満州鏡泊湖より幾千里

長崎県 下田 裕一郎

私は昭和十三年五月、茨城県内原で満州開拓者青少年義勇軍訓練所で基礎訓練修了して渡満、更に寧安訓練所の訓練を修了し、鏡泊湖開拓団に入植し村づくりに進進していた最中の昭和十八年五月、現役兵として入隊し、直ちに河北、山東省方面に転戦を繰り返していたが、鏡泊湖の部隊に転属して、間もなく敗戦をむかえ、世の奇遇に驚いた。

ソ連軍の占領下の満州鏡泊湖で武装解除をうけ、私の苦難が始まった。

古巣の鏡泊湖

村の同志と行動を共にして、全員揃って故国日本に引揚げることを信じていた。

第二の故郷に骨を埋める覚悟の夢は敗れて過ぎ去りしことも頭に浮かび只々涙が流れた。

ソ連軍の命令通り動かされる敗戦国民の惨めさは身に沁る、東京城に終結の命令で、小銃をもった監視兵に囲まれながら歩き出した。

ソ連兵の話では、駅まで歩いて乗車し、ウラジオスツクで下車、船に乗り換えて新潟に入港するという話を信用し、疲れも忘れてお互いに励ましあいながら行軍が続いた。

途中、野宿することとなった。ところが、老幼婦女子と分離して連行させられた。男子は別行動となった。この別れが永遠の別れとなるうとは。

八月の日差しは強く、玉の汗を流し、空腹である。喉は乾き、水一滴も飲ましてくれない、疲れてふらふ

らしている。私は道路のくぼみに溜った馬糞で黄色くなった水を腹一杯飲んだが、不思議に腹痛もおこさず行軍を続けて蘭崗飛行場格納庫の収容所に到着した。

ところが、収容所での食事は馬に喰わす高粱を水洗いもせずドラム缶に入れ、多量の水で粥にして飯盒一杯づつ配給された。副食は何もない。岩塩だけである。二十日間の収容所生活の中で十五日間は野菜は食べられなかった。用便するにも杖に捉まらなれどできなかつた。平時においては、食べ物のことばかり言えば、人間卑しく思ったが、当時は高粱も搗いてないので、渋いのを食べるから下痢をする。または便秘して困っている最中に、ソ連軍から出発命令である。行き先はわからない。私は毛布、飯盒、缶詰の空き缶をもって出発した。行軍中に、ソ連軍から腕時計と万年筆は強奪されたので、時間は太陽の高さで判断した。

暫くして牡丹江方面に向かって行軍だが、飯盒の蓋で一杯の高梁粥では力がない、空腹と戦いながら黙々と隊列から離れないように頑張った。時折、ソ連兵が黒パンを草むらに投げると日本人が砂糖に群がる蟻の

ように奪い合った。ソ連軍は面白がって見ている。人間の本能は動物と同じである。

牡丹江の日本軍輜重隊跡の収容所に入れられた。ソ連兵に連れられて、日本軍属官舎を解体して、暖房用を使用するための作業であった。それと同時に日本人の高級住宅から応接セット、貴重な家具類を強奪したものを荷造りさせる使役である。敗戦国民の哀れさ、日本人の住宅に入って、ソ連軍に手助けせねばならんとは、と悲憤やる方なしの心労である。

ここで私は朝晩の冷えこみに困っているうちに発疹チフスに罹り液河の陸軍病院に収容された。病院は窓ガラスは無く薬品も医師も不在の名ばかりの病院である。暗い大部屋で私はここで死ぬのかな、と思いついて流れる涙をどうすることもできなかった。重傷患者が枕を並べている。朝起きてみると隣りの人は呼吸は止まっている。遺体は内庭の壁のない建物の中に運ばれる。それが毎朝何人か遺体となって運ばれる。遺体が沢山溜るとソ連軍のトラックで日本人の使役がでて死体運搬にくる。凍結した遺体を一人は頭、他の一

人は足を夫々持って1、2、3の掛声でトラックに放り上げて、積み込んで出てゆくのをみて神経が麻痺していたので何とも感じがなかった。幸にも死線を越えて生きのびたのは自ら不思議に思った。

病気が回復して開放されたので、液河から歩いて牡丹江に行き日本人居留民会を訪ねて、働くところを頼んだところ、王さんを紹介してくれた。奥さんが朝鮮人で、とても親切な方だった。食事と寝るところが決まった。王夫婦に助けってもらったことは終生忘れられない。私の中国名を季と呼んだ。しかしある日突然季は日本人だと、ソ連軍に密告されたようだから、早く逃げなさいと言われ、新世界飯店にかけ込んだ。

新世界とは、ソ連軍に納入するウォッカの密造所だった。水を沸して、次にはこれを冷し、次には石綿で濾過する。それにアルコールを割合をきめて混合したものを瓶詰めにする。表通りにリヤカーをもった若者が何処かに持去るのだった。アルコール工場が何処にあるのかわからないように三か所も転々と変わった。

ソ連兵はアルコールを水でうすめたのを本物のウォ

ツカと思つて呑んでいるのは今も不思議である。

居留民会から、東京城駅前で外科医院の松浦院長が、満語の解する人を探しているから会つてくれとの通知である。

牡丹江からソ連のトラックに便乗して東京城に着いて松浦医師から事情をきいたところ、妻が事情あつて三歳の女の子を東京城で満人に売つて牡丹江に引き揚げたが、金を持つてその女の子を買い戻してくれまいかという相談である。

買いつつた満人を知っていたのは門田謙吉氏なので、門田氏の紹介をうけて探しあてたのは、部落で裕福な農家であつた。私はのり子ちゃん、牡丹江でお母さんが待つてゐるから行きましょう、という、嬉しそうに、うん、と言う。養母は、それを聴いて、お前は牡丹江に行きたければ行きなさい。と顔を引きつつて言つたら、のり子ちゃんは、母さん私は行かない、と言つて泣きだした、たつた三か月しか養われていないのに三歳の女の子が満語を覚えていた。私は生みの親より育ての親、ということを痛切に感じた。三日間

滞在し交渉して遂に八百円を渡して引きとつて無事両親に引渡し目的を果たした。

私は、牡丹江を脱出して、苦勞は、ただ苦勞ではない。二十四時間身の危険を克服し家族五人を引き連れ、の苦難である。哈爾濱に落ちついて手当り次第に仕事を探して働いた。

ソ連軍が接収した機械類の解体、貨車積みの作業で食いつないだ。

そのうち日本人居留民会の通訳に採用になつたところ、九月にハルピンから日本に引揚げる病院列車が編成されて約二千人の病人とともに出発となつた。出発前の中共軍の検査でメモ、書類等一切没収された。聴診器まで没収されかかったが、執ように交渉してまぬかれた。列車はコロ島に向かつて走つていた。

何故か雲山万里の満州大陸で日満民族は協和のすばらしい開花した理想社会ごとく失つたことは何としても残念で残念でならない。

大陸の土と化した諸靈安らかに眠れと祈り戦争は残酷であり、悲惨であり、無慈悲であり、犠牲になるの

は老幼婦女子である。引揚げた私は子々孫々に至るまで平和を大切に守り継承する決意を更に新たにした。

現地召集を受けた一引揚者の手記

鹿児島県 石原 匠

大東亜戦争も終末に至るや、当時満州国牡丹江省の石頭に軍人として召集をうけ、捨身の心で訓練をうけていたが、終戦となったのは、私二十歳だった。

昭和二十年九月二日、武装解除となり、ソ連軍の使役を利用されたのち、ソ連兵に引率されて、険しい山又山を越え、どことも知らない広場まで、約五日間の行軍が続いた。

食糧も少なく、体力つきで倒れる者は数知れず、人員も段々となくなり、倒れた戦友を抱きおこし、背におんぶして数十里も歩き続けたが、背中で死んでしまった戦友を、安らかに眠れと山中に埋めたことを思い出すと、今も涙が流れてくる。どこの駅だか記憶にな

いが、ソ連軍に監視された中で乗車し、約三百人は家畜を積み込む貨車に乗った。そこには自動小銃もつた若いソ連兵が乗りこんで厳重に警戒している。

一步も貨車の外には出られない。ソ連兵の通訳から聴けば、日本は負けたので、みんなを日本へ帰すのだ、と言って三日目の夜半に貨車の扉を閉じられて、どこに行くのか見当つかず、疲れて皆車中で、ぐっすり眠ってしまった。

そのうち、停車した駅に下車して、広場で人員点呼を行い、作業別に土木、建築、工業機械、農業に分別して編成された。そしてそれぞれソ連兵の誘導で別れて行った。

私は農業を主とする作業で約百人と一緒に再び貨車にのせられた。その貨車は、ハバロフスクを経てウオロシロフで停車したが、夜間になってから再び進行した。この貨車には電灯もなく、小さな窓から外を眺めてもどこを走っているのか見当もつかない。やがて下車したところは、チタ駅だった。食事は黒パンにスープをとり、暫く休憩していたとき、誰からともなく所